

中学校文化系部活動におけるソーシャル・サポートと適応感との関連

越 良 子*・関 澤 敬 子**

(平成21年9月30日受付；平成21年11月9日受理)

要 旨

本研究は、中学校文化系部活動において、ソーシャル・サポート（以下、SS）の受領あるいは提供そのものが、中学生の所属コミュニティにおける適応感に寄与するという仮説を検討した。文化部に所属する中学生143人（男子24人、女子119人）が分析対象とされた。結果から、SSの提供に関しては、いずれのSSでもそのサポート内容に関わらず、提供が多いほど部活動適応感が高いことが示された。SSの受領に関しては、サポートの内容によって適応感との関連が異なることが示された。これらの結果について、部活動成員のコミュニティ感覚の観点から考察された。

KEY WORDS

ソーシャル・サポート，部活動，適応感，中学生

目 的

ソーシャル・サポート（social support）の授受がどのような機能をもつかについて、様々な立場から考察がなされている。そのひとつに、象徴的相互作用論に基づく考え方がある。

Lakey & Cohen（2000）によると、ソーシャル・サポート（以下、SSと略記）はSS受領者のアイデンティティの形成・維持を助け、その結果、健康の維持・増進に機能する。すなわち、SSの受領は社会的役割としての意味を持ち、その役割がアイデンティティの認識を強め、アイデンティティの認識が健康に影響を与えると考えられている。同様のことは、SSの提供に関しても指摘できる。飛田（1991）は、対人機能を相手から受領することだけでなく、相手に提供できることが、友人関係に対する満足度を高めることを示した。他者に何らかの機能を提供することは、他者との関係において役割を担うことであり、アイデンティティの形成・維持に寄与したものと考えられる。このようにSSの受領と提供は他者との関係において社会的役割をもつことを意味し、その他者とのコミュニティにおける成員としての社会的アイデンティティを形成・維持させるといえる。

このことから、SSは、その内容に関わらず、受領あるいは提供そのものが所属コミュニティでの適応感を高めることが考えられる。SSの受領と提供はそれ自体が役割であり、その役割を担うことこそが、人をコミュニティ成員としてのアイデンティティをもって存在させるのである。したがってSS内容に関わらず、何らかのSSを受領できれば、あるいは、何らかのSSを提供できれば適応感が高いことが考えられる。

この点を越・関澤（2009）は、適応感に対する2種のSSの代替性として明らかにしている。そこでは、中学校部活動集団が取り上げられ、部内において交換されるSSとして技能面に関わるSSと人間関係面に関わるSSが抽出され、両SSの部活動適応感に対する機能が検討された。その結果、技能SSのみを多く受領している場合と人間関係SSのみを多く受領している場合との間に部活動適応感の違いはなく、また、技能SSのみを多く提供している場合と人間関係SSのみを多く提供している場合との間にも部活動適応感の違いはないことが示された。さらに、SSの受領と提供の互惠性（reciprocity）についてみた場合、受領したSSと提供したSSが異種であっても、SSの交換量が同程度で互惠的であれば適応感が高く、交換量に差があると適応感が低いことが見いだされた。

この結果から、SS内容がいずれのSSであっても、適応感に対しては同等に機能することが示されたといえる。SSを受け取ること、SSを提供できることそのものが部活動適応感にとって意味があり、何らかのSSの受領があれば、あるいは何らかのSSの提供ができれば、内容に関わらず適応感が高いことが示された。

しかしながら、越・関澤（2009）で取り上げられた集団は、運動系部活動集団であった。部活動集団に関しては、音楽系部活動での適応感に関する分析において、その構成因子は運動部と同じであるという報告もある（佐川，2008）。しかし一方で、石田・亀山（2006）によると、中学校運動系部活動は吹奏楽部、美術部、コンピュータ部などの文化系部活動と比べ、集団凝集性が有意に高い。また、部活動への意欲に対して、運動部では部員の主体性、集

団凝集性、やる気が評価される集団であるという認知が影響を及ぼすのに対し、文化部では部員の主体性のみが影響していた。つまり運動部では集団として活動する必要が多く、一方文化部は個人で練習や活動に取り組むことが多く、個人的な主体性が重要であり、集団のありかたの影響力は大きくないことが考えられる。そのため、部活動内で交換されるSSやその影響が、運動部と文化部では異なることが考えられる。

そこで、本研究では、文化部におけるSSの授受と部活動適応感との関連を検討し、SSがその内容に関わらず適応感に寄与しうるかどうかを明らかにする。越・関澤（2009）と同様に、特定のSSを多く受領・提供している場合の適応感の検討と、同種および異種SSの交換における互惠性が適応感に及ぼす影響の検討を行う。

方 法

調査参加者 公立中学校2校の生徒743人（男子395人、女子348人）であった。対象校では、全生徒が部活動に加入するよう推奨されていた。

調査時期 2006年7月であった。3年生にとっては部活動を引退する直前の時期であった。

手続き 学級活動の時間を利用して、学級単位での集合調査法による質問紙調査を実施した。

質問紙の構成 (a) 部活動内SSの受領尺度および提供尺度：予備調査に基づいて作成された測定尺度、各21項目を用いた。回答は、各項目に対して当てはまる程度を6件法で求めた。(b) 部活動適応感尺度：部活動での適応感には、その下位側面として、成員として集団に受容されていることの認識や対人面での満足感、部活動で求められる能力や技術について高く評価され満足することなどがあると考えられる。そこで、桂・中込（1990）による尺度の“自己有能感”、“対チームメイト感情”因子、青木・松本（1997）による尺度の“部員との関係”因子の項目を参考に作成された、全25項目からなる尺度を使用した。回答は、各項目に対して当てはまる程度を6件法で求めた。なお、これらの尺度は越・関澤（2009）と同一のものである。

結果と考察

分析対象者の内訳 調査参加者のうち、部活動非加入者25人の他、無回答、記入漏れ、回答ミスのあった人を除いた有効回答者数は618人であった。このうち、文化部に所属する生徒1年生43人（男子9人、女子34人）、2年生43人（男子8人、女子35人）、3年生57人（男子7人、女子50人）、計143人が本研究での分析対象とされた。所属部活動は、科学部、コンピュータ部、吹奏楽部、美術部などであった。運動部所属生徒は、越・関澤（2009）において分析対象とされた。

SS尺度の因子分析 SSの受領および提供尺度の因子構造を確認するため、それぞれについて因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した。その結果、受領尺度2因子、提供尺度2因子が採択された。因子間に重複して負荷量の高い項目（.35以上）を除外し、再度因子分析を行った。

その結果、受領SS尺度において（表1）、第1因子には“部の人はどうしたら技術や能力が向上するかアドバイスしてくれる”、“技術指導してくれる”などの項目の負荷量が高く、技能SSの因子と考えられた。第2因子は、“一緒に遊んでくれる”、“部活動のとき何かをなくしたら一緒に探してくれる”などの項目の負荷量が高く、人間関係SSの因子と考えられた。

提供SS尺度においては（表2）、第1因子には、受領SSの人間関係SS因子に負荷量の高かった項目に対応する“部活動のとき何かをなくしたら一緒に探してあげる”、“学校生活で仲良くしてあげる”などの項目の他、“用具を持ちきれないとき、運ぶのを手伝ってあげる”、“部活動でよい結果が出たとき、一緒に喜んであげる”などの項目の負荷量が高く、人間関係SSの因子と考えられた。第2因子には、“どうしたら技術や能力が向上するかアドバイスしてあげる”、“技術・能力面でできないところを指摘して気づかせてあげる”など、受領SSの技能SS因子に負荷量の高かった項目に対応する項目の他、“技術・能力面で別の手段や方法を教えてあげる”といった項目の負荷量が高く、技能SSの因子と考えられた。このように受領と提供のいずれにおいても、運動部（越・関澤，2009）と同様に、技能SSと人間関係SSの2因子が抽出された。文化部においても運動部と同じく、技能伸長に関わる支援と、成員同士の受容的人間関係に関わる支援とが行われていることが示された。

各因子に負荷量の高かった（.40以上）項目（受領：技能SS 5項目、人間関係SS 7項目、提供：技能SS 4項目、人間関係SS 10項目）の平均評定値を、各SS得点とした。 α 係数は、受領SS尺度では各因子が.91、.85、提供SS尺度では.90、.90であった。

部活動適応感尺度の因子分析 尺度の下位因子を抽出するため因子分析（主因子法）を行い、固有値の推移などが

ら3因子が採択された。プロマックス回転を実施し、因子間に重複して負荷量の高い項目を除外し、再度因子分析を行った(表3)。その結果、第1因子には“私は部員からよく相談される方だ”、“部の人間関係を調整するのが得意な方だ”などの、人間関係面での自身の有用感を示す項目と、“部の人に期待されていると思う”、“部の活動に関して私の意見やアイディアを取り入れてもらえる”などの技能面での有用感を示す項目が負荷量が高く、自己有用感因子と考えられた。第2因子は、“私は技術・能力を磨くことがうれしい”、“私は自分の努力に応じた技術を身につけてきている”などの項目が負荷量が高く、技能満足感因子と考えられた。第3因子は、“私の部は居心地がよい”、“部の仲間との活動が楽しい”などの項目が負荷量が高く、人間関係満足感因子と考えられた。

表1 受領SS尺度の因子分析結果(バリマックス回転後)

	因子負荷量	
	第1	第2
第1因子		
あなたの部の人は、どうしたら技術や能力が向上するかアドバイスしてくれる	.87	.15
あなたの部の人は、技術指導してくれる	.86	.18
あなたの部の人は、技術・能力面で、あなたのできないところを指摘して、気づかせてくれる	.81	.16
あなたの部の人は、見本や手本を見せてくれる	.79	.22
あなたの部の人は、部活動でミスしたら、注意してくれる	.67	.16
第2因子		
あなたの部の人は、一緒に遊んでくれる	-.07	.84
あなたの部の人は、部活動のとき何かをなくしたら、一緒に探してくれる	.18	.79
あなたの部の人は、学校生活で仲良くしてくれる	.16	.71
あなたの部の人は、先生に相談に行くとき、付き添ってくれる	.25	.68
あなたの部の人は、手紙などをくれる	.25	.57
あなたの部の人は、気軽にしゃべってくれる	.10	.56
あなたの部の人は、誕生日を祝ってくれる	.27	.51
因子寄与	3.49	3.35
累積寄与率	29.08	57.04

表2 提供SS尺度の因子分析結果(バリマックス回転後)

	因子負荷量	
	第1	第2
第1因子		
あなたは、部の人が部活動のとき何かをなくしたら、一緒に探してあげる	.78	.19
あなたは、部の人が用具を持ちきれないとき、運ぶのを手伝ってあげる	.77	.17
あなたは、部の人に部活動のとき、あいさつをしたり声をかけたりしてあげる	.73	.26
あなたは、部の人が部活動でよい結果が出たとき、一緒に喜んであげる	.71	.27
あなたは、部の人が努力していることを認めてあげる	.69	.11
あなたは、部の人が先生に相談に行くとき、付き添ってあげる	.67	.27
あなたは、部の人が部活動に必要な用具を忘れたとき、貸してあげる	.62	.24
あなたは、部の人と学校生活で仲良くしてあげる	.58	.30
あなたは、部の人を信頼してあげる	.53	.22
あなたは、部の人に手紙などをあげる	.48	.27
第2因子		
あなたは、部の人にどうしたら技術や能力が向上するかアドバイスしてあげる	.30	.80
あなたは、部の人に技術・能力面でできないところを指摘して、気づかせてあげる	.27	.80
あなたは、部の人に技術指導をしてあげる	.16	.80
あなたは、部の人に技術・能力面で、別の手段や方法を教えてあげる	.32	.77
因子寄与	4.67	3.07
累積寄与率	33.34	55.25

先行研究の運動部での部活動適応感下位因子と比較して、概ね同様の3因子が抽出されたといえる。但し、自己有用感因子に関しては、越・関澤(2009)においては人間関係有用感が抽出されていたのに対し、本結果では、人間関係面と技能面での自己有用感が1つの因子として抽出された形となった。このことは、運動部では技能面での有用感が抽出されなかったということでもある。運動部では、活動内容や練習メニュー、その進め方などが概ね決まっており、そのため技能面での自分の意見や能力が集団にとって有用だという有用感は抽出されなかったものと考えられる。一方、文化部は運動部と比べて活動内容の自由度が大きく、活動内容の決定や活動の推進において部員の力によるところが大きいため、人間関係面とともに技能面での有用感が抽出されたと考えられる。

各因子に負荷量の高かった(.40以上)項目の平均評定値を算出し、以後の分析では、部活動適応感をこの3因子の尺度得点によって検討した。各因子の α 係数は、順に.90、.89、.90であった。

技能サポートと人間関係サポートの受領・提供と適応感との関連 各SSの受領・提供得点の平均値を学年ごとに算出した。各得点可能範囲は1点から6点であり、高いほどSSの授受が多いことを示す。その結果、技能SS受領得点は1年生4.7($SD=1.1$)、2年生4.4($SD=1.3$)、3年生4.2($SD=1.3$)、人間関係SS受領得点はそれぞれ3.9($SD=1.1$)、4.3($SD=1.1$)、4.6($SD=1.1$)、技能SS提供得点は3.2($SD=1.2$)、3.7($SD=1.3$)、4.1($SD=1.3$)、人間関係SS提供得点は4.7($SD=0.9$)、4.7($SD=1.1$)、4.9($SD=1.0$)であった。

次に、技能SSと人間関係SSの部活動適応感に及ぼす影響の検討として、越・関澤(2009)と同様に、受領・提供のそれぞれにおいて、上記の各平均値を基準とした技能SSの高低と人間関係SSの高低を組み合わせる4群を学年ご

表3 部活動適応感尺度因子分析結果（プロマックス回転後）

	因子負荷量		
	第1	第2	第3
第1因子			
私は部員からよく相談される方だ	.82	-.19	.05
部の人間関係を調整するのが得意な方だ	.74	-.12	.07
私は、ムードメーカーとして部の雰囲気をよくすることができる	.72	.03	.02
私を好きだと思ってくれる部員がたくさんいる	.71	-.19	.28
私は部の人に期待されていると思う	.68	.18	-.09
困っている部員がいたら力になってあげられる	.66	.08	.09
部の活動に関して、私の意見やアイデアを取り入れてもらえる	.62	.11	-.13
私の技術・能力は、部にとって必要だと思う	.60	.33	-.22
部の技能面で、私には果たすべき役割がある	.45	.31	.02
第2因子			
私は、技術・能力を磨くことがうれしい	-.20	.84	.13
私は、自分の努力に応じた技術を身につけてきている	.11	.77	-.04
私は、練習してうまくなるのが楽しい	-.14	.76	.21
私は、以前より活躍できるようになってきている	.25	.69	-.09
私は、自分に期待していたとおりの能力を身につけてきている	.19	.63	.06
第3因子			
私の部は居心地がよい	.05	-.06	.89
私は、部の仲間との活動が楽しい	-.03	.15	.81
私は、部の仲間満足している	-.07	.05	.76
私は、部の同級生とうまくいっている	.15	.13	.68
因子間相関		第1 第2 第3	.67 .44 .37

表4 各群の人数

群	受領			提供		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年
技能SS高・人間SS高	17	16	29	17	19	24
技能SS高・人間SS低	11	8	6	4	5	7
技能SS低・人間SS高	4	7	6	9	7	10
技能SS低・人間SS低	11	12	16	13	12	16

数値は人数。

たということでもある。この結果は、因果の方向を明らかにするものではないけれども、人間関係SSの提供はアイデンティティの形成・維持を支え、そのため人間関係面以外での適応感も高めうるし、技能SSの提供も、アイデンティティを支え、そのため技能面以外の適応感も高めうる可能性を示すものと考えられる。ただし、1年生の人間関係満足感に対して、人間関係SSと技能SSは逆の機能をもつことも示された。すなわち人間関係満足感、人間関係SSが多いほど高いのに対し、技能SSが多いほど低かった。1年生が技能SSの提供をすることは、低い人間関係満足感に繋がる可能性が示唆されたといえる。

表5 各SSの受領・提供と適応感との偏相関係数

		1年生			2年生			3年生		
		自己有用感	技能満足感	人間関係満足感	自己有用感	技能満足感	人間関係満足感	自己有用感	技能満足感	人間関係満足感
受領	技能SS	-.14	.21	.21	-.07	.38*	-.05	-.39**	.19	.06
	人間SS	-.15	-.14	.36*	.15	.14	-.10	.01	-.14	.20
提供	技能SS	.30 [†]	.27 [†]	-.31 [†]	.28 [†]	.08	.35*	.65**	.56**	-.01
	人間SS	.32*	.18	.27 [†]	.28 [†]	.31*	.20	.32*	.23 [†]	.10

[†] p<.10 * p<.05 ** p<.01

とに設定した。しかしながら人数の少ない群が多く（表4）、学年別の分析には不適当であった。一般に部活動においては、上級生が下級生に対して指導や支援を行い下級生がそれを受けるといった学年による役割期待があり、従ってSSの影響の検討は、学年別に行う必要があると考えられる。

そこで、学年別に各SSと適応感との偏相関を算出した（表5）。なお受領と提供の相関は、3学年全体で、技能SSにおいて.44、人間関係SSにおいて.81、技能SSと人間関係SSの相関は、受領において.39、提供において.55であった。

表5より、受領に関しては、1年生において、人間関係SSの受領が多いほど人間関係満足感が高く、2年生においては技能SSが多いほど技能満足感が高いことが示された。3年生においては、技能SSが少ないほど自己有用感が高いことが示された。これらより、文化部においてはSSは受領自体が適応感に寄与するのではなく、SS内容に固有の機能が適応感に関連したといえる。また、各SSの影響は学年によって異なり、技能SSの受領は2年生にとっては自身の技能伸長への満足感につながるのに対して、3年生にとってはむしろ自己有用感を低めるものであることが示唆された。

提供に関しては、全体として、いずれのSSも各適応感に関連していることが示された。人間関係SSも技能SSも、それらが多いほど全学年の自己有用感と3年生の技能満足感が高いことが示された。また1年生でも技能SSの提供が多いほど技能満足感が高く、2年生では人間関係SSが多いほど技能満足感が高く、技能SSが多いほど人間関係満足感が高いことも示された。これらは、人間関係SSは人間関係満足感のみならず技能満足感や自己有用感に、技能SSは技能満足感だけでなく人間関係満足感や自己有用感に関連してい

表 6 各SSの受領と提供の差（絶対値）と適応感との偏相関係数

	1 年生			2 年生			3 年生		
	自己有用感	技能満足感	人間関係満足感	自己有用感	技能満足感	人間関係満足感	自己有用感	技能満足感	人間関係満足感
受領・技能SS－ 提供・技能SS	-.18	.10	.12	-.27 [†]	-.01	-.21	-.19	-.11	-.19
受領・技能SS－ 提供・人間SS	.05	-.04	.05	-.02	.02	.10	.28*	-.07	-.04
受領・人間SS－ 提供・技能SS	-.20	-.22	.11	-.00	-.11	-.33*	-.30*	-.19	.01
受領・人間SS－ 提供・人間SS	.08	.01	-.09	-.12	-.17	-.08	.11	.20	-.17

[†] $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

これらより、文化部では、SSの提供に関して、SSの内容に関わらず適応感と関連し、提供自体が高い適応感に寄与することが示された。一方SSの受領に関しては、SS固有の機能が適応感に関連することが示された。

SSの授受における技能サポートと人間関係サポートの互恵性の影響 SSの受領と提供の差が小さく互恵的であることと適応感との関連を、同種及び異種のSSの授受において検討を行った。ここでは、受領と提供のズレの方向でなく、SSの互恵性すなわち同程度に交換されていることの影響をみるため、各SS受領得点と提供得点の差の絶対値を算出し、これらの値と各部活動適応感との偏相関を学年ごとに求めた（表6）。

その結果、全体としては有意な偏相関値は多く得られず、文化部において、SSの受領と提供の差すなわちSSの互恵性は、適応感に対してあまり影響しないことが示された。しかしながら、2年生の技能SS同士の交換において、受領と提供の差が小さいほど自己有用感が高いことが示された。また、異種SSの交換については、受領と提供の差が小さいほど2年生において人間関係満足感が、3年生において自己有用感が高いことが示され、異種SSの交換においても、互恵的であることが適応感を高める可能性は示唆されたと考えられる。このように、部分的ではあるが、SSがその内容に関わらず同程度に交換されていることが適応感を高めることが示唆され、すなわちSSの内容でなくSSの受領あるいは提供そのものが適応感に対して重要である可能性が示唆されたといえよう。また、3年生において、受領する技能SSと提供する人間関係SSの差が大きいほど自己有用感が高いことも示された。絶対値を用いない両者の単相関係数は、-.17と有意ではないことから、文化部3年生にとっては、技能SSの受領が人間関係SSの提供に比して多いこと、あるいは、人間関係SSの提供が他方に比して多いことのいずれもが自己有用感につながるといえる。

以上の結果を総合すると、文化部においては、SSの提供に関して、その内容に関わらず提供すること自体が部活動適応感を高める可能性が概ね示唆された。技能SSにしる人間関係SSにしる、他の成員に提供し貢献できることが、アイデンティティを形成・維持し、所属集団での適応感を高めるといえる。

一方、受領に関しては、受領自体が適応感に寄与する可能性は部分的に示されたが、全体としては、SSの種類に特有の機能が適応感を高めることが示唆された。これは、ストレッサーとサポートの適合の重要性が指摘されるなど（Cohen & McKay, 1984; Cutrona & Russell, 1990）、各種SSにはそれぞれの機能があるとされる知見と一致する結果といえる。

なお、参考として、文化部と運動部のSS授受の程度を比較した。本研究の文化部SS尺度と越・関澤（2009）の運動部SS尺度とに共通して含まれる項目のみを用いて、文化部、運動部それぞれの受領・提供SSの平均を算出した。その結果、人間関係SSの受領得点において文化部の方が運動部より有意に高かった（3学年平均 文化部4.1（SD=1.2）、運動部3.9（SD=1.1）； $F(1,616)=4.34$, $p<.05$ ）。他のSSに関しては、受領技能SSはそれぞれ4.4（SD=1.3）、4.5（SD=1.2）、提供技能SSは3.7（SD=1.4）、3.7（SD=1.5）、提供人間関係SSは4.8（SD=1.0）、4.6（SD=1.0）で、それぞれ文化部・運動部間に有意差はみられなかった。このように、文化部では人間関係SSの受領は多く、しかしそれは、先述の結果より、部活動適応感全体に寄与せず人間関係満足感と関連するのみであった。

これらから、分析対象となった文化部では、成員において、自身がコミュニティを構成する一員であるという認識が弱く、SSの受領がコミュニティでの自身の社会的役割を意味しなかったことが考えられる。互恵性分析においても互恵性が適応感とあまり関連せず、このことから、運動部と比べ文化部においては、各成員が相互依存的に活動を形成しているという認識が弱かったことが示唆される。そのため、受領すること自体が適応感に対して機能しなかったものと考えられる。但しSSの提供に関しては、他者に貢献するという行為の形がコミュニティでの役割を担っているという認識につながりやすく、適応感と関連したものと考えられる。

また、本結果から、文化部においても、学年によって部活動適応感に対するSSの影響が異なることが示された。技能SSの受領は2年生の適応感にとって肯定的影響をもつものに対して、3年生にとっては否定的影響の可能性が示された。また、1年生では、人間関係SSを提供するほど人間関係満足感が高いが、技能SSを提供する場合、むしろそれは低かった。このように、上級生は技能SSを受領しないこと、下級生は技能SSを提供しないことが、部活動適応感、特に人間関係満足感を高め、すなわちそうした役割期待のあることが示されたといえる。

最後に、今後の課題として、因果の方向性、すなわちSSの受領・提供がアイデンティティに寄与し、それ故に適応感が高まるというプロセスを直接的に検討する必要性が指摘できる。学年による役割期待のあることが明らかにされたので、そうしたプロセスの学年間比較も望まれる。また、文化部の多様性の問題も指摘できる。文化部においても、団体を活動する必要の高い部と専ら個人的活動が中心となる部がある。それらを区別した比較検討も必要であろう。

引用文献

- 青木邦男・松本耕二 (1997). 高校運動部員の部活動適応感に関連する心理社会的要因 体育学研究, 42, 215-232.
- Cohen, S., & McKay, G. (1984). Social support, stress, and the buffering hypothesis: A theoretical analysis. In A. Baum, J. E. Singer, & S. E. Taylor (Eds.), *Handbook of psychology and health*. Vol.4. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp.253-267.
- Cutrona, C. E., & Russell, D. (1990). Type of social support and specific stress: Toward a theory of optimal matching. In B. R. Sarason, I. G. Sarason, & G. R. Pierce (Eds.), *Social support: An interactional view*. New York: Wiley. pp.319-366.
- 飛田 操 (1991). 道具的ならびに情緒的対人機能の提供と獲得が関係への満足度に及ぼす効果—女子青年を対象として— 教育心理学研究, 39, 67-74.
- 石田靖彦・亀山恵介 (2006). 中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響—部活動集団の特徴と部活動への意欲に着目して— 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 9, 219-225.
- 桂 和仁・中込四郎 (1990). 運動部活動における適応感を規定する要因 体育学研究, 35, 173-185.
- 越 良子・関澤敬子 (2009). 中学生の部活動適応感における部活動内ソーシャル・サポートの機能 心理学研究, 80, 345-351.
- Lakey, B., & Cohen, S. (2000). Social support theory and measurement. In S. Cohen, L. G. Underwood, & B. H. Gottlieb (Eds.), *Social support measurement and intervention*. Oxford University Press. pp.29-52.
- 佐川 馨 (2008). 音楽系部活動に所属する高校生の部活動適応感測定尺度作成の試み 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 30, 53-63.

The Relation between Social Support and Adjustment to Extracurricular Activities in Nonsport School Clubs among Junior High School Students

Ryoko KOSHI* • Keiko SEKIZAWA**

ABSTRACT

This study examined the hypothesis that receiving and/or providing any social support would positively contribute to junior high school students' adjustment level in extracurricular activities in nonsport school clubs. Data were analyzed from 143 junior high school students (female 119, male 24) who were taking nonsport extracurricular activities in science, computer science, music or art. The results were as follows. Providing support related to students' overall adjustment level regardless of the contents of the supports whereas receiving support indicated different relations with the students' adjustment level. These results were discussed in terms of not only the sense of the belongingness but also the development of the sense of community in each nonsport school club.

KEY WORDS

social support, extracurricular activities, adjustment, junior high school students.

* School Education

** Joetsu City School District, Naoetsu Junior High School